

9

2020

三重病院

ニュースレター

news letter vol.253



01 「おへそ」の病気

02 臨床研究部からのお便り—第28回—

03 通所支援事業のひとコマ
やまばとギャラリー情報コーナー
5病棟の生活のひとコマ⑥
医療安全便り vol.1404 病院からのお願い
外来からのお知らせ／外来診察のご案内

おへそはお母さんとつながっていた臍帯(へその緒)が脱落した後の傷あとのようなものですが、様々な異常①炎症、②腫瘍形成 ③ヘルニア ④痛み などがみられることがあります。

① **炎症**は臍の緒が脱落したあとに肉芽ができ、それが皮膚になっていくのですが、この時細菌などが感染すると、ジुकジुकしたり、膿がでたりする臍炎になります。

新生児以降では、擦ったりひっかいたりしてできた傷に感染し、炎症を起こすこともあります。

臍炎がなかなか治らない、何度も繰り返す、(膿がたまる)膿瘍を形成するなどの場合は、臍の緒の遺残組織(生まれる前、お母さんのお腹のなかで通っていた動脈と静脈、膀胱や腸とつながっていた管の尿膜管や臍腸管など)の感染を疑います。

ふつう臍腸管や尿膜管は生まれるまでに無くなりますが、無くならず残っていることがあります。完全に残っているとおへそから腸液や尿が出てきますが、完全に残ることは極めてまれで、多くは一部だけ残る場合で、ポリープ様の腫瘍形成や炎症を起こし気づかれることが多いです。遺残尿膜管はまれに癌になることもあります。

② **腫瘍形成**は、前述の臍ポリープ以外に、臍の緒が脱落したあとの肉芽が増殖し、腫瘍状になった肉芽種、皮膚や皮下の腫瘍が、たまたま臍にできたもの、後述するヘルニアが治った後の余剰皮膚の塊などがあります。

③ **ヘルニア**とは、臓器が本来ある場所以外に飛び出す状態で、体のいろいろな部位にみられます。小児では下腹部から陰部が膨らむ鼠経ヘルニア(脱腸)が有名です。

おへそのヘルニアは臍ヘルニアといい、臍の緒が脱落した後、臍帯がお腹の壁を通っていた跡が閉じる過程で、うまく閉じず、そこへ腹圧によって、腸などの内臓が脱出し、おへそが膨らむ病態です。わが国では、小さいものも含めると乳児の1~2割にみられます。

臍ヘルニアの多くは、臍帯脱落後から徐々に大きくな

り、2、3か月ころ最大となり、その後だんだん小さくなって、6か月頃までには治ってしましますが、大きさに変化がない場合や治らない場合もあります。

鼠経ヘルニアは、自然治癒することがほとんどなく、嵌頓(脱出した腸が穴で締め付けられ、戻らない状態で、最悪、腸が壊死して命にかかわる)が5%くらいにみられるため手術が必要となります。一方、臍ヘルニアは、嵌頓や破裂などの重篤な合併症はまれで、ほとんどが自然に治るため、合併症がなければ、1歳までは様子を見て、1歳過ぎても治りそうにない場合は手術治療が勧められます。1歳時以降も縮小傾向が続いていれば、2、3歳までは様子を見るのもいいでしょう。

臍ヘルニアの治療として、発症して早い時期に、ヘルニアが脱出しないようテープで圧迫して、自然治癒を助ける方法があります。この療法は、必ず治るとはいえませんが、放置するより早く治ること、ヘルニアが大きくなりにくいので治癒後の余剰皮膚の塊ができにくく治癒後の跡がきれいなどの効果があります。反面、治療期間が長いと数か月かかること、赤ちゃんの皮膚は弱いため、テープによる炎症やかぶれなどの問題もあります。

④ **おへその痛み**: お子さんは、よく、おへそのあたりを痛がる場合があります。痛い部分が、おへそ自体、周囲腹壁、お腹の中(腸などの内臓)の場合があります。

おへそ自体だと上記の①~④が、周辺腹壁だと、臍腸管や尿膜管の膿瘍が考えられます。

お腹の中は、5歳以降くらいで、あまり重篤感はなく、おへそあたりの痛みを繰り返し訴えることがあります。多くは便秘異常を含めた、腸管の機能障害に起因する痛みで、器質的疾患がないことなど原因を調べ、内科的、心療科的治療が主となります。

以上いろいろ述べましたが、おへそについて、気になること、困っていることがあれば、一度小児外科で相談してみてください。
(小児外科 塚本 能英)